

# 倉庫に眠る紙たちに、もう一度スポットライトを。 ゼロ・ウェイストをベースとした 「やさしい封筒」が拓く未来



平和紙業の東京・大阪・名古屋の各ショップペーパーボイスで購入された四つ切サイズの紙を包む封筒に新たにやさしい封筒が加わりました。

今回、使用された封筒の素材は、平和紙業の倉庫に眠っていた「常備在庫販売を終了した商品」。これらをごみゼロを目指す設計により、余すことなく活用して出来上がったのがやさしい封筒です。開発のきっかけは、平和紙業のある社員が長年抱いていた「紙にもう一度活躍の場を」という想い。その想いに共感し、設計と製造に携わったお二人との座談会を通じ、紙を用いた社会課題の解決に挑戦する平和紙業の取り組みをご紹介します。 ※従来のクラフト紙封筒と併用します。

## プロフィール

人の繋がりを大切にし、共に成長する抜き加工会社  
株式会社東北紙業社 加藤 清隆さん

紙や印刷の可能性を探り、  
デジタルとフィジカルの境界を横断しながら紙や印刷の新しい価値を生み出す  
株式会社ペーパーパレード 守田 篤史さん

風合い豊かな紙「ファンシーペーパー」をつくり、届け、  
持続可能な社会づくりに寄与し、情報社会の中で新たな価値の構築する  
平和紙業株式会社 松尾 英子

# 「まだ、輝けるはず」 紙にもう一度、命を吹き込みたい。

守田：まず、どんなきっかけから今回の封筒のアイデアが生まれたんですか？

松尾：さかのぼってみると、今の部署に来る前から10年ほど、商品をリユースできないかと考えてきました。お客様の価値創造をお手伝いするために生まれてきたのに、日の目を見ずに倉庫に眠っている紙。素敵な紙がたくさんあるのに、使われずに終わるのはもったいないと感じていました。



ペーパーボイスショールーム / 平和紙業 松尾英子

松尾：その後、販売推進本部に異動し、平和紙業のショップ「ペーパーボイス東京」で、接客する機会ができました。店頭に立ったとき、購入された紙の包装紙として、当社の常備在庫販売を終了した商品や、断裁に失敗して使えなくなった素敵な紙を使ったところ、お客様がよろこんでくださったんです。包装紙を見たお客様が「この紙いいですね！」と興味を持ち、似た紙を買い求めてくださることもありました。日の目を見ることのなかった商品が活躍できる場面は、もっとあるはずだと感じましたね。

加藤：そんなに前から「もったいない」という想いを持たれていたことに驚きました。実際に封筒づくりの話が出てきたのは2021年の春頃でしたよね。

松尾：そうですね。紙業界はリサイクルが根付いていて、たとえ紙として役割を果たせなくても別の紙として再生できます。でも、できるだけそのままの姿を活かしたい。最後にスポットライトを当てたい。そんな想いもあって、東北紙業社さんにご相談しました。もともと、お店の封筒にはクラフト紙が使われていましたが、「わたしたちは紙屋なんだから、自社の紙でつukれないか」と考えるようになりました。

## 条件をひとつずつクリアする方法を、 使い手と一緒に考える。

加藤：最初にいただいたのは「常備在庫販売を終了した商品を有効活用した封筒をつくりたい」というご希望でした。なので、当社が得意とする抜き加工やスジ押し加工だけでできる単純な構造を考えました。平和紙業さんのショップで使われ、平和紙業さんのファンシーペーパーを使用した封筒なので、ロゴもくっきり浮かび上がるよう、通常よりも圧を加えたデボス加工を施すことにしました。

松尾：そこから、わたしたちの希望をどんどん伝えてしまっ（笑）。今思うと、東北紙業社さんだから「やってみよう」と挑戦してくれましたが、無茶なことも申し上げたかなと……。

加藤：条件があると、クリアしたくなるんですよ（笑）。なんとか希望を形にできないかと考えて実現に向けて動くのがわたしたちの仕事です。



加工機の調整 / 東北紙業社 加藤さん

松尾：ありがとうございます。まずお願いしたのは、誰でも素早く組み立てられる封筒にしたいということ。各ショップには、封筒が平らな全紙の状態が届きます。組み立てるスタッフの負担が少なくなるようにしたいと思っていました。次に、テープを留めずに中身を包める仕様。テープを剥がした跡が残ると、「もう一度使おう」という気持ちになりにくいですね。わたしたちとしても、何度も使っていただけたらと思っていたので、テープで紙を傷つけない形にしたいと加藤さんをお願いしました。

加藤：松尾さんのお話からは、封筒を扱うスタッフさん目線、封筒で紙を持ち帰られるお客様目線が感じられました。持ち手の部分も、手を切らないような仕様に工夫しましたよね。設計には、現場を知る松尾さんのアイデアが活かされています。

## 余すところなく全紙を活用する、「ゼロ・ウェイスト」の考え方。

松尾：封筒の大枠が決まったところで、ペーパーパレードの守田さんにも設計に関わっていただきました。ここで「ゼロ・ウェイスト」の考え方が設計に反映されたんですね。

守田：そうですね。「素敵な紙が使われずに終わるのはもったいない。最後に輝いてほしい」という想いを伺い、紙好きの一人として、全紙に余すところなくスポットライトを当てたいと考えようになりました。一般的なパッケージは、つくる過程で多くの端材が出ます。端材は活用できなければゴミになってしまいます。

そこで「製造加工上のゼロ・ウェイスト（「ごみゼロを目標に、できるだけ廃棄物を減らそうとする活動）」というコンセプトを考えました。



封筒設計打ち合わせ風景 / ペーパーパレード守田さん(左) 東北紙業社 加藤さん(中央) 平和紙業 西谷浩太郎(右)

加藤：私は、守田さんのデザインが実際に形にできるかできないか判断し、技術的な面をアドバイスしました。切り落としてしまえば簡単のところも、「ゼロ・ウェイスト」を目指すならどうしたらいいかと、守田さんとアイデアを出し合いましたね。

守田：切り落とさなかった持ち手のパーツは、そのままでは邪魔になります。でも、穴をあけてパーツを折り込むようにすると、雨除けにもなる。すべてのパーツに役割を持たせ、必然性を与えたいと考えながらデザインしていきました。



製造加工上のゼロ・ウェイストを実現した封筒

## 封筒を通して社内外の共感を呼び起こし、紙を用いた社会課題解決へ。

松尾：お二人のおかげで、私自身も持ち歩きたい封筒に仕上がりました。お客様の反応が今から楽しみです、わたしたちの商品がアップグレードされたことがとにかくうれしいです。面積が大きいので、紙によって印象がガラッと変わるのも素敵です。何度も再利用していただけるように、リユースできる封筒であることをお渡しの際にアナウンスしたいと思います。お客様との会話のきっかけにもなると思うので、当社の営業社員にも持ち歩いてもらえたらいいですね。

加藤：ひとまず完成はしましたが、ここからがスタート。この封筒に込められた「もったいないをなくしたい」や「もう一度、残紙を輝かせたい」という想いを社内外に丁寧に説明し、「そういう想いから始まった活動っていいね」と共感いただくことが大事になる気がします。

松尾：そうですね。つくって終わりではなく、この封筒が「紙を使った社会課題解決」のひとつとして認識いただけるように、丁寧にコンセプトを伝えたいと思っています。

守田：平和紙業さんの紙の魅力が伝わりながらも、無駄のないプロダクトになったことはデザイナーとしてもうれしいですし、この取り組みが平和紙業さんのサステナブルにつながっていけばと思います。今回は、四つ切サイズの商品に対応して全紙を使いましたが、ゆくゆくは、半裁や四つ切、八つ切などをベースにサイズ違いの封筒を用意して、全社的な取り組みになっていけばいいですね。常備在庫販売を終了した商品の場合、もう手に入らないので、紙が好きな方にとっては貴重品。ある意味、普通の封筒より大事に使っていただけるかもしれません。

松尾：常備在庫販売を終了した商品であっても、一部の色だけが廃番になる「廃色」がほとんど。封筒の紙に興味を持ってくださった方に「色違いはありますよ」といった提案もできます。封筒を開くと、全紙の大きさを体感できます。普段、ショップで四つ切サイズをご覧になっているお客様にとっては新鮮だと思います。

平和紙業という会社は、持続可能な社会をつくるために小さくても実際に行動している。封筒がその象徴となり、わたしたちの姿勢に共感してくださったお客様とアイデアを出し合って、この先も社会課題に向かっていきたいです。

